HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	正確に話を聞き出せますか? : レッツ! 聞き上手母さん（5）
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	ファミリス, 2008(10), 22-23
Issue Date	2008-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/44755
Type	article
Note	編者 : 社団法人 静岡県出版文化会
File Information	LKK2008_5.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

レッツ！ 聞き上手母さん⑤

正確に話を聞き出せますか？

北海道大学大学院教授
仲 真紀子

裁判のときに、子どもが証言している事例も少なくありません。

しかし、多くの事例で、子どもの証言はあまり信用されていません。その原因の一つは、聞き取りの方法にあります。

周りの大人があれこれ不注意に聞いてしまったために、子どもの記憶があいまいになる、子どもが大人の暗示を受け入れてしまう、といったことが起きているからです。

このような事情はどこの国も同じで、欧米では80年代から、子どもへの事情聴取法の開発が大きな研究課題とされてきました。その結果、心理学を活かした面接法（司法面接といいます）が確立し、使われるようになりました。

司法面接は、訓練を受けたことのある面接官（児童相談所の相談員など）が行わなければなりません。

しかし、その基本は、いざこざや事故の解明、病気の原因（何か変なものを食べなかったかなど）を探るときのように、体験をできるだけ正確に話してもらう場合にも役立ちます。司法面接は日常の会話とはかなり異なりますが、子どもから話を聞き出すときの参考として紹介します。

（イラスト／村松麗子）

●なか まきこ●福岡県生まれ。北海道大学大学院文学研究科教授。認知心理学，発達心理学専攻。母子会話，子どもの記憶に関する心理学研究のほか，子どもの司法面接，目撃証言などの研究を行っている。主な編著訳書として「目撃証言の心理学」（共著，北大路書房），「子どもの面接法－司法手続における子どものケアガイド」（アルドリッジ・ウッド著，仲編訳，北大路書房）など。

司法面接には、次のような原則があります。

①早い時期にたずねる

受けた被害や目撃情報は、時間が経つにつれてあいまいになっていきます。早い時期、できれば2～3日以内には、話をきちんと聞き取ることが必要です。

②会話を録画または録音する

子どもが何をどう報告するかは、大人がどのようにたずねるかによって変わります。そのため、やりとりのすべてをありのままに記録する必要があります。録画、録音を始めるときには、必ず面接者と子どもの氏名、年月日、時刻を入れておきます。

③面接場所と面接をする人

面接は居心地のよい、しかし、おもちゃなど、子どもの注意をそらすものがない部屋で行います。面接は、できればあまり親しい間柄ではない、中立の立場の大人が行います。

次に面接の手順ですが、次のように行います。

①ラポール

「ラポール」とは、信頼できる関係性のことをいいます。最初は事件とは関係のない事柄を話すなどして、子どもの緊張をほぐします。

②自由報告

自由報告とは、「何があったかお話しして」「そして？」「それで？」などの質問です。子どもの答えに制約をつけることなく、できるだけ多くの情報を聞き出します。

③WH質問

自由報告で十分な情報が得られない場合、WH質問を使います。たとえば、自由報告の中に時間についての情報が含まれていなければ、「いつ？」とWH質問でたずねます。

④クローズ質問

WH質問でも答えられない場合は、「昼休みの前？　それとも後？　それともわからない？」などのクローズ質問を使います。ただし、争点となりそうなことを、直接たずねてはいけません（たたかれたかどうかが問題となる場合に、「たたかれたのか？」とたずねるなど）。

⑤誘導質問

ここまでで、十分な情報が得られればよいのですが、どうしても得られなければ、「落ちたの？　落とされたの？　それともわからない？」と、最後にたずねなければならないかもしれません。

しかし、このような質問で得られた情報は、誘導がかかっていると批判されることもあります。したがって、最後の手段だといえるでしょう。これで何も情報が得られなければ、この子どもは話す状態にないと考え、面接を終えます。面接を終えるに当たっては、子どもに感謝し、中立な話題に戻し、終了します。